



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

王であるキリスト C年(2022年11月20日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：サムエル記下 5章1—3節

第二朗読：コロサイの信徒への手紙 1章12—20節

福音朗読：ルカによる福音書 23章35—43節

王おうであるキリスト

最初の公会議こうかいぎであるニケア公会議(325年)の千六百年を記念する1925年、教皇ピオ11世(在位1922年—1939年)は12月11日付で回勅かいちよくを発表し、11月1日の諸聖人の祭日直前の日曜日、すなわち10月最後の主日しゆじつを「王であるキリスト」を祝う日さだと定めました。当時は第一次世界大戦後で、無神論や独裁体制などの影響えいきようがみられるようになった時代でした。そのような状況の中でこの祭日を定めることによって、キリストこそが人類世界おさを治める最高の権威けんい者、王であることが示しめされました。その後、1969年の典礼暦の改定により、終末における完成せいとキリストの再臨さいりんへの待望たいぼうと関連づけて、年間の最終主日うつに移されることとなりました(中央協議会の解説より)。

第一朗読はダビデが王かしよになる箇所たみです。「わが民イスラエルを牧ぼくするのはあなただ」(サム下5章2節)は印象的な表現です。王は民を牧する方なのです。戦後の教育を受けた日本人は「裸はだかの王さま」に見られるように王はカリカチュア(風刺画)の対象でした。つまり、王は風刺され、時には馬鹿ひはんにされ、批判ほんらいされる存在となりました。しかし、本来、王は人々のために尽くす者なのです。そのために「長老たちはダビデに油を注ぎ、イスラエルの王」としたのです(3節)。

第二朗読は、聖パウロが古代教会の典礼の中で歌われていた賛歌さんか(キリスト賛歌)を用いて宇宙の王である主イエス・キリストを讃たたえています。

福音朗読に「ユダヤ人の王」(ルカ23章38節)と呼ばれてさげすまれた十字架のイエスさまは、罪人つみびとである犯罪人の一人に「あなたは今日わたしと一緒に楽園いつしょにいる」と宣言できる天の国の王なのです。

第二朗読に集中してみましょう。

『コロサイの信徒への手紙』は獄中にあるパウロが書き送ったものです。この他にも『エフェソの信徒への手紙』、『フィリピの信徒への手紙』、『フィレモンへの手紙』も同様に獄中から書き送ったものです。これらを総称して『獄中書簡』と言います。

しかし、『コロサイの信徒への手紙』は、実際にパウロが書いたものではなく、パウロから教えを受けたある人が書いたものだとするのが学者たちの一致した理解です。パウロが死んでしばらくした西暦80年代が執筆の時期でしょう。

フランシスコ会訳聖書を見ますと、1章13-23節には「宇宙の主キリストをたたえる」という表題がつけられています。この中で15-20節が古代教会の典礼の中で歌われていた賛歌だと思われま

この賛歌は二つの部分からなっています。

- ① 15-18a 節: 主イエス・キリストが宇宙のなかでもっとも大切なものであることが強調されます。
- ② 18b-20 節: 主イエス・キリストの贖いのわざが宇宙全体におよぶことが強調されます。

どうやら、コロサイの教会の信徒たちは、少し教えを誤解していたようです。おそらく、彼らは人間を超えた様々な霊の存在を信じていたのでしょう。そして彼らは、それらの霊によって生きていると考えていたようです。さらに、罪を犯した人間が神さまと和解するためにはそれらの霊が仲介すると考えていたようです。しかし、霊よりも、天使たちよりもっと優れていて、大切な存在は主イエス・キリストです(これをキリストの首位性と言います)。そして、罪の贖いは主イエス・キリストの十字架のわざによって成り立つのですが、コロサイの教会の信徒たちはイエスさま無しの救い、イエスさま無しの神さまとの和解を考えていたのだと思います。

